

「第13回家庭教育セミナーの報告」

令和4年10月9日仙台市民会館で久しぶりに対面でのセミナーを開催しました。参加者は18人でした。感染対策を行いながらではありますが、やはり直接の交流ができるということは講師にとっても参加者にとっても大きな刺激になりました。今回は宮城県の家庭教育支援チームとの交流ということで県の教育庁生涯学習課の高山弘樹主幹と大崎市家庭教育支援チーム代表の波多野ゆかさんを講師としてむかえました。

高山主幹からは県のとりくみとして高校での親になる準備のプログラムの様子などを話していただきました。波多野さんからは宮城県版親の学びのプログラム「親のみちしるべ」の中から思春期のお子さんとその親御さんがスマホのことをめぐって対立してしまう架空の状況を設定してそれについてスモールグループで話し合ってみるという参加型の学びの場となりました。

最初は自己紹介や相手の目を見てお互いにあいさつし合うなど緊張をほぐすところからグループワークがはじまりました。マスク越しの交流ではなかなか相手の気持ちを理解するのが難しいということも体験から学び、子どもたちがコロナ禍で置かれている大変な状況を実感しました。

架空のケースでは中2の男の子がスマホにのめりこんで成績もさがり、お母さんがテスト前にスマホをとりあげて、それで子どもが反抗的になるという場面が提示されました。そのときの子どもの気持ちと家族の対応についてグループで意見を出しあいました。子どもは友だちとLINEでやりとりしていたのかもしれないとか、スマホの使い方のルールを決めた方がよいとか、神経質にならずに放っておいてもいいのでは、などさまざまな見方・考え方ができてお互いに参考になりました。

波多野さんが強調されていたのは親子の心のキャッチボールができているか、子どもの目を見て（アイコンタクトして）よく話を聞いて、話をしてあげているか、ということでした。また子どものためにがんばっているのに誰もほめてくれない親自身が自分をほめることも忘れないでというメッセージも印象に残りました。